

## 文楽座十一月興行概括評〈摘録〉

〈出典：「浪花<sup>浪花</sup>名物<sup>名物</sup>浄瑠璃雑誌」第三百十八号、昭和7年12月〉

不景気を嘆ずる民衆の声も耳がたこになりては一時の変則的付景気も本調子に直ったものと認むるものもあり。浄瑠璃<sup>きび</sup>の寂れを嘆き<sup>そ</sup>其の復活を祈る声は斯界<sup>やかま</sup>に喧しきも月並会の相当重れるを見て其の殷賑<sup>いんしん</sup>を證<sup>あかし</sup>せんとするものある。然れども斯<sup>しか</sup>の如きは決して殷賑でも復活でもなく、真の復活は民衆の共鳴、多数の感触でなければならぬ。竹本座が無援孤城を死守して居るに反し文楽は二千万円の資本を有する興行王が経営して居るから其の対立比較を云為するのではないが、前日竹本座を聞いた吾等が今文楽座に入って如何<sup>いか</sup>なる感想がするか一個の私見なりと雖も社会には如何程の同感者あるやも計られず、茲<sup>こゝ</sup>に直観を陳ぶ。幸に芸道の上に於て参考となるべきものあらば採用して貰いたい。価値なければ放擲御勝手に任す。

竹本座には家族的親みが濃厚なるに反し文楽には友愛的情味<sup>みなぎ</sup>が漲<sup>み</sup>って居る。竹本座に対しては芸の細評を避けたいが文楽には徹底的に評して見たい気がする。竹本座に対しては成るべく擁護主義を執りたいが文楽の方には鞭韃主義になり易い。一方は養成を主とし一方は販売を主として居る。吾等は個人としては文楽にも竹本座にも多数の知己を有するから決して情愛に厚薄の差はない。只両座の方針と実際の状態に相違があるので随って吾等の接する態度と注文も異なるものがある。各地方出張の為一寸覗く<sup>いとま</sup>違<sup>ちが</sup>あざりしが仕舞日も近づきたれば万障を排して吾等の入場せし日は恰<sup>あたか</sup>も野澤吉弥師の組が催されてあり堀江演舞場役員お茶屋太妓素人連中で二百を超えある様子に見ゆ。

## 前狂言 絵本太功記

夕顔棚の段	母さつき	吉田小兵吉
竹本大隅太夫	妻 操	吉田文五郎
鶴澤 道八	嫁 初 菊	吉田扇太郎
尼ヶ崎の段	久 吉	桐竹 政亀
切 豊竹古鞆太夫	重 次 郎	吉田 玉松
鶴澤 清六	正 清	吉田 文作
	光 秀	吉田 栄三
	軍 兵 大 ぜ い	

夕顔棚<sup>すなわ</sup>は則<sup>すなわ</sup>ち十日目の端場<sup>はば</sup>一に題目<sup>だいもく</sup>ともいう。南無妙法蓮華経南無妙法蓮華経とお題目を唱うるが故なり。御法の声もから語る大隅師は東京では何人もない程の人気である。人気というも畢竟実力の存するが故であるが借切場<sup>きて</sup>になるとなかなか問屋が安く卸さない。それは折角の器量を有し乍ら切場の経験<sup>なが</sup>が少ない故であろう。どしどし語るべきである。されば此の端場は如何というに大隅師に適合せる役場ではない。これ程の太夫さんであるから得手不得手は言わない何でも引受ける覚悟はあるが矢張り切場を語るべき大きな器量である。端場と切場の語風は素人でも彼是<sup>かれこれ</sup>云うから茲<sup>こゝ</sup>に縷述<sup>るいじゆつ</sup>する必要を認めない。実に旨い

事語ってある。確<sup>たしか</sup>に芸力の進歩を示してはいるがどうしても切場の風である。大まかなる語口。不細工でも雄大とか剛壮とかいう方面が師の特長と信ずるから放膽に語りサラサラとねばらぬ様に願いたい。何時も完全に無事を言わないだけ師の未来に発展の余裕が存するものと信ず。古靱師の次に紋下の栄位は必ず廻り来るであろう。人生太夫とならばたとえ三日と笑われても一度は紋下に据るべきである。努めよ努めよ。道八師の色音と雄大さは又格別である。偕古靱師の尼ヶ崎切場は数度聞いたが、其<sup>そのたびごと</sup>度毎に幾何かの変化がある。此変化は研究の産物。以て師が其語り物に対し如何に忠実なる研究者であるかを雄弁に証拠たつるものと思う。吾等の知己に昨年来古靱師崇拜のお凝りが出来た話がある。無論素義界に於て嘖々の名誉ある某大家である。某はお上手は些も滯さない素直な性質である。過る頃弊社を訪問して曰く、僕は古靱の如き煮詰った様な浄瑠璃は嫌いだが、何時も君が筆にも口にも古靱古靱と云うからマア一度聞いて見よう若し其結果の如何に依っては大に君の批評に抗議を持込む積りで往聴した。外題は女護島！聞いて居ると成程君がいう通り偉い、一つの大芸術だ聞き惚れた。以来毎興行必ず文楽に往聴し場合によっては二回も繰返す事もあると、今では古靱宗の大信仰家となった人だがそれと相伴うて最も慎重に聞く「一間え入にけり」から段末まで聞蕩けて人形を見る暇がなかった。故越路太夫とは全然行方が違うが芸術的には寧ろ古靱<sup>むし</sup>さんの方に云うべからざる味がある。太十といえど何人でも語り何人でも知って居る。我家の何やらは知らいでも太十を知らない者はないと天下の評判ものだけに六ヶ敷<sup>むつかし</sup>い理由も茲に存し普通一遍月並式では人の耳を聳<sup>そばだ</sup>てしめる事は出来ない。此故に平素工夫研究を重ね鍛錬に鍛錬を加えたのが則ち今回の十日の段で、其の一文字一章句の意義が緩急と抑揚とに依りて表現せらるる貴重尊厳を極むる大芸術で作者の企図せし太功記なるもの大精神は遺憾なく完全に語り尽された近來の大傑作である事を読者に報導する光栄を得た訳である。隣りの某大天狗涙と汗を流して曰く吾笑さんどうです面白く聞けましたね！。浄瑠璃のはやらぬのは第一黒人素人の別なく研究が出来ないから厭になるのだ。此の浄瑠璃を聞いて誰れが飽きます。次から次へと映画の如く展開して行く瞬速の間と拍子に云うべからざる味がある、是れは到底真似得ざる古靱師独占場の特産物ですと非常に賞讃していた。天狗という者は人を貶しる事を好む者じゃが茲では流石に棒も張り得ず神妙に聞いて居た。これも芸術の威力に圧されたのだ。末の世までも残しけりて廻った時は満身の力を抜き取られた如く凧の糸の切れた如く只何気なく拍手を以て送ったのであった。